

\*Penは月2回刊、1日と15日発売。

Art アート  
pen selectionデザインのメッカを埋め尽くす、  
唯一無二の“眼差し”たち。

『2008年 目玉商品展 “Bulls Eye Special 2008”』

美術評論家 赤坂英人

東京における新たなデザイン・メッカと言っても過言ではない「21\_21 DESIGN SIGHT」で、ユニークな企画が始まった。「2008年 目玉商品展」という、バーゲンセールのようなタイトルが異彩を放つ。

今回、企画ディレクターを務めたのは三宅デザイン事務所の北村みどり、アーティストの日比野克彦、編集者の小黒一三の3人。タイトルの「目玉」にかけて、優れた視力、や、目をテーマに、幅広いジャンルのデザイナーとアーティスト、そして20社を超えるパートナー企業がコラボレートした。ヴァシリス・ジディアナキス、吉岡徳仁、トニー・アウスラー、ティム・ホーキンソン、山元勝仁といった作家たちが腕によりをかけた「目玉」たちが会場を埋め尽くしている。

壁一面を飾るのは写真家のフランシス・ジャコベットの作品だ。彼が撮ったフェデリコ・フェリーニ、アウン・サン・スー・チー、レンゾ・ピアノ、世界的なバーソナリティの瞳と肖像の写真を合わせた「HYMN」シリーズは圧倒的な存在感で、この展示

コンセプトを象徴している。それは、さまざま人間の生と、それぞれの視点の「唯一無二さ」を表している。若手からベテランまで、多種多様な才能と発想を相手に、パワフルな会場構成を行った日比野克彦は言う。

「僕は、目分量で仕切りました。安藤忠雄さんが建築を手がけ、深澤直人さんや佐藤卓さんがディレクションした展覧会が開かれたことも、ただだんと色がついています。ここでの「料理」の出し方として、そろそろ、ジャンクな料理、も食へたいという気分になるんじゃないでしょうか。たとえば、屋台とか、おでんとか」

会場のいたるところに使われた段ボールがその言葉を裏付けている。

「僕は、デザインはコミュニケーションだと思っただけです。人と人との空気感とか、モノと人との接し方とか、そうしたものがデザインですから、種々雑多なものがあつたほうが、その空気感

は生まれると思います」

ジャンクな、エネルギーとヒューマン視点の交差。そんなアートの躍動を、感じさせる空間である。

photo: G. Freguesi ©ATOPOS



上：ギリシャのヴァシリス・ジディアナキスはサーレン社独自の印刷技術により「オップ・ザ・シクロプス」を作った。写真はそのイメージを喚起した魔除けのお守り「Blue eyes」。下：「HYMN」プロジェクト、フランシス・ジャコベットのタイムキヤノンマーケティングジャパン。現在も継続されている、世界的クリエイターの瞳とポートレートを組み合わせた作品。今展を象徴する作品だ。

～3/16 21\_21 DESIGN SIGHT ☎03-3475-2121  
 営11時～20時（入館は閉館30分前まで）  
 休火 料一般¥1,000  
 www.2121designsight.jp